

**報告 ドイツ3月前期におけるヨ-ロッパ中心主義的  
反ユダヤ主義：ヘ-ゲル左派および初期社会主義者  
の歴史構想によせて（近代反ユダヤ主義研究の現状  
と問題点<日独歴史学シンポジウム>）**

著者	野村 真理
雑誌名	歴史学研究
巻	585
ページ	10-13
発行年	1988-10-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9666">http://hdl.handle.net/2297/9666</a>

報告

ドイツ三月前期におけるヨーロッパ中心主義的  
反ユダヤ主義——ヘーゲル左派および初期  
社会主義者の歴史構想によせて——

野村真理

近代ドイツ史におけるユダヤ人問題の展開を考察する場合、二つの時代を区別することができる。すなわち、ヴィルヘルム・ドームによってユダヤ人の市民社会への統合に関する議論が開始された1781年から、ユダヤ人の法的解放が最終的に実現された1871年までの「ユダヤ人解放の時代」と、1870年代後半に始まる「近代的反ユダヤ主義の時代」とである。近代的反ユダヤ主義の諸特質、およびその発生の歴史的諸前提に関して、私はリュールupp教授の諸論稿から多大な示唆を受けた。今日、私は、先の二つの時代区分のうち、前者の特に三月前期に着目

し、当時のヘーゲル左派および初期社会主義者の歴史構想におけるヨーロッパ中心主義的反ユダヤ主義について報告したいと思う。「ユダヤ人解放の時代」において、ドーム以来解放とはつねに、少数者であるユダヤ人が民族的同一性を放棄し、ドイツ社会のなかに完全に統合されることを意味していた。三月前期のヨーロッパ中心主義的反ユダヤ主義は、この百パーセントの同化の要請にたいして、一つのイデオロギー的根拠を与えるものである。一例として、ここでは、ユダヤ人の初期社会主義者、モーゼス・ヘスをとりあげたいと思う。

ヘスの思想展開がとりわけ興味深いのは、ヘスがヘーゲル左派の一人として出発し、1848年革命の前夜にはマルクスの共産主義思想にもっとも接近したといわれながら、革命の挫折後、彼の初期の歴史構想とは相いれないユダヤ民族主義の世界へと回帰し、シオニズムの先駆者となったことによる。あらかじめ言っておけば、ヘスはこの回帰をまっとうすることはできなかった。ヘスは、初期のヨーロッパ中心主義とユダヤ民族主義とのほざまにとどまることになったのである。

さてまずはじめに、初期ヘスの歴史構想について述べておきたい。ヘスは処女作『人類の聖史』(1837年)において、人類の内的、精神的発展を、スピノザをふまえて神の認識の増大過程とつかみ、それと手を携えて進む外的、社会・経済的発展を、社会主義的財産共同体の形成過程ととらえる。そして、内的、精神的発展と、外的、社会・経済的発展とがともに完成されたときにはじめて、人類の解放が実現するとする。こうした歴史把握にもとづき、ヘスは第二作『ヨーロッパ三頭制』(1841年)において、ヨーロッパ革命の構想をたてる。すなわち、精神の自由によるドイツではまず「社会・精神的自由」が、意志の力に優るフランスでは「社会・人倫的自由」が、実践感覚に優るイギリスでは「社会・政治的自由」が達成されるが、これら三つの自由は、それぞれたがいに契機として作用しあうことによって、一つの完全な自由とならなければならないとされる。ヘスによれば、大衆の貧困と貨幣貴族制との対立は、イギリスにおいて「革命的な高まり」にまで達していた。それゆえ社会主義革命は、はじめにイギリス

にて勃発するであろう。このイギリスの社会革命にドイツ的自由とフランス的自由が結合することにより、さきの完全なる自由の実現態としてのヨーロッパ三頭体制が成立するのである。そしてこのヨーロッパに誕生をみた社会主義的財産共同体は、資本主義的世界市場を媒介として、やがてヨーロッパから全世界へ拡がるとされるのである。

ヘスばかりでなく、ヘーゲル哲学の影響をうけた初期社会主義者は一般に、西欧における資本主義の進展を世界史そのものと同一視する。彼らによれば、資本主義が、それゆえ階級闘争もまたもっとも発展している西欧は、社会主義革命の担い手となる世界史的使命をおびていた。このことから、少数民族や、資本主義が未発達な周辺民族の民族運動にたいするヨーロッパ中心主義的攻撃が生じてくる。その一例として、『新ライン新聞』紙上のエンゲルスをあげることができよう。エンゲルスは、「近代的諸民族」のみが国民国家として独立する権利をもつとする。ここでいわれる近代的民族とは、たとえばイギリス人やフランス人のように、統一的国内市場と中央集権的政治権力をもつ資本主義社会を成立させ、そのなかからブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立を生みだしうる民族のことであった。そしてエンゲルスは、資本主義的展開の推進者として社会主義革命へといたる「歴史的民族」と、国民的自立のための社会・経済的條件を欠いたスラヴ人のような「歴史なき民族」とを厳しく区別し、世界史における後者の役割は、せいぜいその進行を妨げることでしかない、とするのである。スラヴ民族にたいするエンゲルスのこのような否定的評価は、近代の世界史を、資本主義から社会主義革命にいたる単線的展開ととらえる歴史把握から生じたものである。資本主義の進展が世界を平準化するにしたがって、階級対立は、ますますその民族的、地域的特殊性を失い、最後の世界恐慌とともに勃発する社会主義革命においては、プロレタリアートとブルジョアジーとが民族的区別なく対立するのである。国民国家は、資本主義社会の一時的な政治形態であった。それゆえエンゲルスにとって国民国家が進歩的な意味をもつのは、封建主義にたいして資本主義を貫徹させなければならないかぎりのことであって、ブルジョア

ジーとプロレタリアートとの階級対立という新たな戦線が成立するや、国民国家は反動的なものとなるのである。

このような見解にしたがえば、社会主義革命が日程にのぼっている現在、国民的自立を求めようとするユダヤ人の運動は時代錯誤であり、反動的でさえあるだろう。1844年のマルクスは『ユダヤ人問題によせて』において、ユダヤ人はブルジョア社会のなかで解放されることを要求している、と批判する。すなわちユダヤ人は、たんに形式的な平等と自由しかないブルジョア社会での解放を要求しても、前ブルジョア的な不平等、不自由を、資本主義的不平等、不自由と取り替えるだけだといっているのである。ユダヤ人は、もはやたんなるブルジョアの解放ではなく、社会的解放を直接にめざすべきであった。プロレタリアートとともに資本主義社会を乗り越え、社会主義社会へと進むべきなのである。ところが、もしユダヤ人がブルジョア社会での解放を望み、さらに自らの民族的自己同一性に固執して、国民国家という資本主義社会の遺物を手にいれようとするのであれば、ユダヤ人は、その廃棄のために闘うプロレタリアートにたいして反動側につくことになる。

社会主義者ヘスにとっても、西欧社会に同化しないユダヤ人は、「停滞性という呪い」をうけたオリエントの民族であった。キリストの時代に自らのちっぽけな国家の再建のことばかり考え、西欧キリスト教の偉大な普遍的理念を我がものとしなかったユダヤ人大衆は、以後、世界史の発展からとり残されてしまった、というのである。

最後に、1848年革命後のヘスの思想展開について見ておくことにする。三月前期の初期社会主義者としてのヘスが、民族主義よりは階級闘争の優位を主張していたのにたいし、1862年のヘスは『ローマとエルサレム』において、民族運動と階級闘争との関係を次のように定式化する。「これまでの歴史は人種闘争と階級闘争のなかを動いてきた。人種闘争こそ本源的なものであり、階級闘争は副次的なものである。」そしてヘスは、ユダヤ民族のための闘いに参加すると宣言するのである。

ヘスがユードントゥーム(ユダヤ民族、ユダヤ教)に回帰した動機については、ヘス研究において興味

深い問題ではあるが、ここでは、二つの点を指摘することにどめたい。第一点は、1848年革命挫折後に革命家たちをおそった、いわゆる *Europamüdigkeit* (ヨーロッパの革新にたいする絶望を含んだ倦怠感) とヘゲル的な意味での歴史の進歩にたいする疑問である。1859年のイタリア戦争の後、ヘスは、ヨーロッパの革命的再生にかけた最後の希望を捨てるのである。

第二点は、19世紀の、とりわけ1848年革命後に爆発した少数民族の民族意識の覚醒である。『ローマとエルサレム』においてヘスは、世界史においてヨーロッパのみが主役を演じてきた時代は終わったとし、いまや、いかなる人種に属するどんな小さな民族でも、世界史のなかに自らの場所を主張することができるとする。ヘスは、少数民族の民族運動は西欧列強を担い手としてきた資本主義文明の平準化傾向にたいする「健全な反動」であるとし、自らの文化、自らの言語をもつあらゆる民族に、世界史的使命を遂行する権利を認めるのである。それゆえユダヤ人の民族的自立もまた、世界史の日程にのぼることになる。

しかしながら、はじめに述べたように、ヘスは、初期のヨーロッパ中心主義的な歴史観を完全に克服できたわけではない。ヘスは、理論的には混乱しており、彼のシオニズムは、問題の多いものといわざるをえない。というのもヘスにおいて、植民活動によって建設されるユダヤ人国家は、一つのヨーロッパ型の近代的国民国家にほかならず、そのようなものとして、アジアにヨーロッパ文明を広める使命をおびていたからである。パレスチナのユダヤ人は、日々市場を拡張しなければならないヨーロッパの産業のために、発展の遅れたアジア諸国へ向かう道を開拓する。そのことによって、アジアの歴史なき民族は、ヨーロッパ文明を享受することができるようになる、とされるのである。ヘスの主観的意図はとうであれ、ここに現れているのは、アジアの植民地化のヨーロッパ中心主義的正当化であろう。すなわちヘスは、最後まで、ヨーロッパ中心主義と、非ヨーロッパ民族としてのユダヤ民族主義とのほざまに、両者を理論的に整合化できぬままとどまったのである [なお、この短い報告のなかで詳述できなかった

点については、拙稿「後期モーゼス・ヘスにおけるユダヤ民族への回帰をめぐって」(『一橋論叢』第93巻第5号, 1985年), および拙稿「ヘーゲル左派とユダヤ人問題」(良知力・廣松渉編『ヘーゲル左派論叢』第三巻, ユダヤ人問題』御茶の水書房, 1986年, 巻末解説)を参照していただければ幸いである。